



アマチュアリズムが 良かったのに…

木村 松夫

(フォトライター)

三好春樹さんとの出会いは、拙著『よい介護とはなにか』で1項目を設けているので、ここでは別の切り口で語ろう。

家族にとっては、役所の福祉課の役人も保健所の保健婦も、施設の職員も派遣ヘルパーも、このテーマを追っているジャーナリストでさえも、およそ介護を仕事としている人たちはみな、ある一線の向こうにいる。専門家と素人、プロとアマの一線である。そして、専門家はいつも素人に対して権威者であり、時として権力者として立ち現れてくる。

それに対して、従来のプロがやってきたやり方は実生活に即さないことが多くて、普通の生活者の発想からの方がよい介護ができるんだよと言ってくれたのが、三好春樹さんだった。老親を介護する家族が、この人ならば心を開けると感じたのは、三好さんにこうしたアマチュアリズムを見つけたからだった。

否、家族ばかりでない。現場で頑張っているケアワーカーたちが自分たちのリーダーとして三好さんを押し上げたのも、実はこのアマチュア精神だったのではないだろうか。権威や肩書きや資格で仕事をするのではなくて、生活感覚でやろうじゃないかという雰囲気があちこちの介護現場にゆきわたっていて、その雰囲気を三好さんは「生活リハビリ論」として体系的に理論化してくれたわけだ。

アマチュアリズムを底流とする限り、それは境界なく広がり繋がるものであるはずだ。ところが、近頃ではケアを仕事としている人

たちによる生活リハビリの仲間集団がつくられてきているように、私には見えるのだ。

たとえば、最近のある研修会の案内文だが、「あの〇〇さんと△△さんの…」 「あの北海道ツアーの『実行犯』たち…」 というように「あの」付き文が目立つ。それはそれで仲間集団のテンションを高めるのだが、「あの〇〇さん」を知らない人、「あの北海道ツアー」の盛り上がりを共有できない人には、この研修会はすでに別世界のものになってしまっている。あっちの方で生活リハビリ信奉者が繰り広げている文化祭にしか見えない。専門家集団の外にいる者にとっては、これがなおさら鼻につく。

そうした仲間集団化の促進に、三好さん本人の言動が影響していないわけがない。本誌のコラム「地下水脈」ではカギカッコでくくった三好さん特有の概念が多用され、異論へは容赦のない批判が加えられる。その先に、生活リハビリの理論化を超えて独自の思想の構築がある。ご本人が意図するかしらないかにかかわらず、それを軸にして人々が集まってくると、いつの間にか流派ができあがる。

このやり方が日本の介護現場に革命をもたらすのかも知れないので、うかつには否定できない。が、そうだとすると、ケアを仕事としていない家族にはやっぱり違和感がある。

結局、専門家と素人という一線は越えられないのだろうか。近頃の三好さんは遠くに行ってしまったようで、とても淋しい。